

# 論文の和文要旨

論文題目	ダンテ『神曲』と個人の出現
氏名	原基晶

## 第一章 ダンテ批評史

本論文は、国民国家イタリアの国民文学として、ナショナルな枠内で文学史的に完結したイタリア文学のダンテ像を越えることを目指した。本章では現代のダンテ批評が発原点において抱えこんだ政治性を概観する。

ダンテは最初期の14世紀からレクトゥーラ・ダンティスという講座名で大学教育と結びついてきた。これは、教育の問題として、19世紀に成立した国民国家イタリアの国民にとって共通の経験となる国民文学創出に関係した。また、『神曲』本文のテキストは、国民を創造する上で重要な統一言語の問題とかわることになった。

イタリアでは、中世の小国乱立時代から文化的統一体としてのイタリアが意識され、15・16世紀には共通言語の必要性が唱えられた。最初に俗語で記念碑的な作品を書いたダンテは重要な役割を果たしたが、議論の過程で主導権を握ったピエトロ・ベンボにより、ペトラルカとボッカッチョが韻文・散文のモデルとされた。しかし、19世紀のリソルジメント期になると、最初に「イタリア」概念の復権を訴えたダンテがイタリアを象徴する詩人として再評価されることとなった。『神曲』は新生イタリア王国の国民文学となり、新国家の国語のモデルとなった。このように「神曲」の再評価は極度に政治性を帯びていた。こうして『神曲』の真正のテキストが求められ、一応の結果の出る1921年

がダンテ批評の転換点となった。同年にはクローチェの、『神曲』を「詩」と詩を支える構造物に分けた論考『ダンテの詩篇』も刊行され、これが『神曲』の近代批評の出発点とされた。

第二次世界大戦後、イタリアの『神曲』批評では美学的なものは排除され、歴史主義的な研究手法が主導的になった。そして国民国家が揺らいでいる現在のイタリアにおいて、不安を感じる国民の間では、広場で大衆を動員したレクトゥーラ・ダンティスともいえる『神曲』朗読がブームになる一方、研究はより堅実であろうとし、実証的な歴史研究の発展から明らかになった事実をダンテの解釈に反映する方法がとられている。

## 第二章 フランチェスカ・ダ・リミニとダンテをめぐる研究史

近代と現代のダンテ批評の分水嶺となったのは第二次大戦前まで支配的だった美学的批評に代わって歴史主義的な研究手法が導入されたことにある。その中で解釈に最も影響を与えたのは、主人公ダンテをめぐる問題であった。その検討をするために、本章では「地獄篇」第五歌に登場するフランチェスカのエピソードをとりあげた。

国民国家成立時のロマン主義的批評の代表的論者にフランチェスコ・デ・サンクティスがいる。彼は作品中のダンテを歴史的に実在したダンテ本人と同一視し、登場人物ダンテとフランチェスカとの出会いをあたかも実際の事件であるかのようにとらえ、そこに人間存在の真実としてフランチェスカが描かれているとした。彼は、『神曲』の神学的部分やアレゴリーなどは詩ではなく、真実の認識の邪魔にしかならないとして退けた。しかし1955年のサペーニョのこの箇所への注釈には、14世紀の注釈に作者ダンテと登場人物ダンテの概念が見いだされると指摘し、また、アンドレーアス・カッペラーヌスの『宮廷風恋愛について』などがフランチェスカの言葉の背後にあると指摘した。後にコンテニーニがそれらの概念を使って『神曲』を詩論として読み解き、フランチェスカはダンテが乗り越えるべき詩を代表しているに過ぎないとした。現在では思想史の展開を受けて、ここにラテン・アヴィロエス主義をめぐるダンテとガイド・カヴァルカンティの詩の対立を読み込んでいく。

だが、そもそも文献学の最初期には、人類にとって普遍的な内容であるためにそのテキストを研究する価値があり、普遍であるがゆえに歴史主義的な方法論はとらないとする教育主義的な流れと、歴史的文脈の中で研究対象の作品をとらえる歴史主義的な流れがあった。ロマン主義批評はまさに普遍的な「人間」の姿をそこに発見した。そして、ダンテにおいてはじめてそこに「人間」

の姿を発見したという驚きに、歴史主義的方法論はいまだ返答していないように思われる。

### 第三章 失われた自筆原稿を求めて（冒頭三行のテキスト・解釈と登場人物ダンテ）

登場人物であるダンテがどのような人物として創造されているかを考察するために、『神曲』冒頭の三行を検証した。そこには、作者ダンテを取り巻く状況が描きこまれ、それに向き合う主人公の設定が示唆されていた。

最初に、現代の印刷本に採用されている数種の『神曲』原文を比較する。そこには明らかに本文の違いと、それに付随する解釈の違いが見られた。さらに『神曲』の邦訳や英訳を参照しながらそれぞれの訳者が依拠した本文とその解釈を考察した。そして解釈の揺れの原因を歴史的に探るために、考察はインクンナブラや最初期の写本にまで及んだ。

結論として、筆者はヤーコポ・アリギエリの語彙の解釈を受けたイングレーゼ版の指摘を採用した。そして、ここにはダンテの置かれた当時の状況が描かれていることを確認し、聖書の引用から登場人物ダンテには神から特殊な使命が与えられたとされていることを指摘した。

### 第四章 預言する詩人ダンテ

主人公「私」は『神曲』を読むにあたって読者の依拠する場所となるが、その人物は実際のダンテそのままではない。本章では、その人物に与えられた設定を考察した。

近年明らかになった伝記的事実から、ダンテは初期の代表作『新生』で、自身のストーリーを歴史的事実とは異なる一種の聖者伝として創作したとされる。それは「私」が経験を報告するという手法で、それが事実であるかのように書くというものだった。『神曲』でも同様の手法が使われ、出来事を報告する「私」は登場人物の一人だった。結論として、『神曲』中の主人公「ダンテ」は、キリストや預言者を暗示する姿で造形されている。『神曲』において、ギリシヤ神話のヘラクレースやテーセウスはキリストの予型として表現されているが、ダンテもまたそのような人物の一人だったのである。『神曲』の来世への旅が復活祭に行われたのもそのためである。登場人物ダンテは地上に救いの道を説く預言する詩人として創造されたのである。

## 第五章 『神曲』と個人の出現

ダンテの現実描写は西暦1300年の「現代」と関係するダンテ自身と同時代の人々や出来事に顕著である。その表現は、ダンテの持っている「歴史意識」に由来する。

ダンテの時代は過渡期であった。それまでの封建制の人間が、上層階級（貴族・聖職者）と下層階級に分かれ、円環状に繰り返される時間の中で、タイプとしての人生を生きただのに対し、ダンテのいた社会では中間層（都市住民）が生まれ、下層階級にも職人などの都市労働者が出現した。小金融業者の家出身のダンテは平民層に属し、遠隔地間の金融操作や価格差によって莫大な利益を上げる大銀行家と対立関係にあった。彼は、教皇庁との結びつきを強化しようとする黒派貴族と対抗して平民層と同盟関係を結ぼうとした白派貴族の側に立ったため、祖国から追放されることになった。ダンテはその現実を克明に描き、『神曲』には、商業革命を迎えた多様な都市住民のそれぞれの個性が刻み込まれた。彼は個人を個人として描いたのである。

また、商業活動とは都市間の貿易のことでもあり、商業のためには平和が必須であることから、『神曲』を統合する基本的理念は、全世界の平和というものであった。

## 第六章 ベアトリーチェの微笑

ダンテの文学は商業革命の中から生まれてきた。その現実描写は、新たな社会において可能となった多種多様な人生を描く必要から生じた。それゆえに『神曲』中には煉獄という死後の一世界が登場するのだ。都市市民が主役となった世界では、個人として人間存在が重要視され、個人のさまざまな行動を倫理的に判定するための場所が必要だったからだ。そして判定の基準には、上述の商業革命によって成立した都市商人の文化から生まれた平和思想が大きく関係した。

ダンテの政治的著作『帝政論』では、人間には自由意志が与えられており、人間が最も自由な状態に置かれているならば、人間個人が神を志向することはゆるがないとされる。そして人類全体が平和にあるならば、個々人の資質が完全に開花し、人類は神へと近づくと考えられた。その世界平和には、文化的相違を乗り越える人間相互の理解可能性が前提とされた。ダンテは、人間を人間たらしめる本質である個々の魂が、共通の知性的な霊（プネウマ）として神から与えられている点にその可能性を求めた。同じ「知性体」であることから、魂は他の魂と了解可能であり、それゆえに平和が可能だされた。つまりダンテ

の場合、人間相互の理解可能性は、まさに人間であるという事実に求められた。

「天国篇」には上記の思想が表現されている。冒頭では、世界は神の光により創造され、創造された全存在は神の光を反射するという世界の創造原理が提示される。その、事物をあらしめる神的光線が「神の愛」、反射光が「神への愛」と換言できる。だからこそ「天国篇」第五歌で、ベアトリーチェには、ダンテの知性の中で永遠の光が反射している様子がはっきりと分かるのだ。つまり、ダンテの思想では人間の本質をなす「魂」は神が直接人間に吹き込んだものであり、それが神の光線、すなわち神の愛という言葉で表現されている。

そう考えると、太陽光線とその反射の輝きは、地上において神の愛を象徴することになる。例えば「地獄篇」第十歌の、詩人ダンテと対立したライヴァル、ガイド・カヴァルカンティの瞳に太陽の光が輝かないという描写は、彼が神の愛による創造の奇跡を信じていないことを表現している。そうした例の中で特異なものが、「地獄篇」第二十六歌のオデュッセウスの言葉だった。 *ma misi me per l' alto mare aperto* (だから、私は、飛び込んでいった、果てしなく広がる大海原のまっただ中へ)。彼の言葉の「a」の音を作る口の形とアルファベットの形は円をイメージさせる。そしてその開口音の「a」が三回畳みかけるように続く *alto mare aperto* の a の音は、広がる大海のイメージを作る。そして海は広がる青空の反射であり、それは神のいる宇宙と地上の照応関係を示すが、オデュッセウスは神のアレゴリーである太陽の輝く空と青空を映す海ではなく、沈む太陽を追って地上に真理を探してしまった。

こうした光による円と直線のイメージは、『神曲』冒頭を解釈する鍵となり、神曲全体を貫いて、天国での見神の体験に結実することになる。

## 終章 結論

本章では論文全体をふり返った後で、本論文が、ダンテの現実描写について、アウエルバッハの予型論的説明を超えて、それがダンテの歴史意識から生じてきたこと、さらに、社会的制度という観点からはルネサンスに個人の概念は成立していないという近年の歴史学の主張と異なり、ダンテの現実描写は、ブルクハルトの言うように個人という概念の社会における表現となっているという考察を述べる。